

企画展 新聞の中の文学

2017年・連続特別講演・

東京大学 駒場博物館

モデレーター：ピーター・ロビンソン（日本女子大学）

6月10日

14:00～15:00

新聞と雑誌における著名文学者 ～戦間期のオーストラリア～*

デイヴィッド・カーター（クイーンズランド大学）

新聞と雑誌が20世紀初頭以後にとった新たな形態は、近代の産物であると同時に、翻って近代を（再）生産するものでもあった。新たな定期刊行物が流通させた近代の所産のひとつが、有名人である。この有名人の中には映画スターをはじめ、演劇・オペラ・ラジオのスター、そして一定の条件のもとではあるが、芸術家や作家も含まれる。本講演では、戦間期オーストラリアの新聞を用いて、いかにして作家が当時の報道の中で有名人として紹介されえたのかを、他の種類の有名人の場合と比較しながら探る。またオーストラリアの作家がいかにして、より著名な海外の人物と肩を並べて紹介されたのかも探りたい。



デイヴィッド・カーターは東京大学アメリカ太平洋地域研究センターの招聘教授（オーストラリア学。2016-2017年）で、クイーンズランド大学教授（オーストラリア文学と文化史）。書物史や出版、定期刊行物研究ならびに近代研究の分野で研究を行ってきた。近刊の著書に『いつも、あとちょっとで、モダン ～オーストラリアの出版文化と近代～』があるほか、アメリカ合衆国におけるオーストラリア人作家・オーストラリア関連

書籍の歴史をめぐる大きな研究を終えたところである。

15 : 00～16 : 00

気まぐれなキャプションと不安定な語り
～ヒュー・ロフティング『ドリトル先生』の新聞挿絵～*

ピーター・ロビンソン（日本女子大学）

ヒュー・ロフティングの代名詞にして、動物と話ができる気の優しい中年男、ジョン・ドリトル博士は、1920年の『ドリトル先生物語』でアメリカの一般読者にお披露目された。二年後にはそのイギリス版が刊行され、『ドリトル先生航海記』が出版された。『ドリトル』シリーズについては、近年、再版時に人種差別的な表現が削除されたことで論争が起こった一方で、書籍の商業的成功に便乗して同時代の新聞が作品を連載したことについては、ほとんど注目されてこなかった。1922年10月29日から、『ニューヨーク・トリビューン』紙が『物語』と『航海記』の両作品を『ドリトル先生の冒険』の題で週刊の『サンデー・マガジン』に連載した。本講演では、連載版が大体において原典テキストを忠実になぞり、ロフティング自身による特徴的な挿絵を再利用しながらも、いかにして、作者ではない編集者が挿絵のキャプションが書き換え、作品の語り手の位置関係を変えていったのかを探る。



ピーター・ロビンソンは日本女子大学文学部英文学科准教授。地方史・歴史哲学・英文学など様々なテーマについて著書・講演多数。専門は思想史と印刷文化史、とりわけ18世紀における書籍広告。豊富な私蔵資料に基づいて、本特別展「新聞の中の文学」を企画。イギリス・サセックスの地方歴史家による研究団体〈ライトハウス〉を共同創設、またイギリス遺産宝くじ基金の援助による文芸活動「サウス・ダウンズ・アルファベット」を共同企画。最新の論文では、『モスクワ・ニュース』紙を用いてソ連におけるシェイクスピア受容を分析した（渡辺愛子との共著）。現在、『デイヴィッド・ウィリアムズ選集』（ラウトレッジ、2018-19年）の監修を担当。また17世紀からデジタル時代までのイギリスと日本の書籍広告についての科研プロジェクトの代表を務める。

6月17日

14:00～15:00

19世紀末における文学的福音主義 ～ロマン主義から感傷性まで～*

ロジャー・ロビンス（東京大学）

アメリカ福音主義は今日、文化的主流の外部に留まるものの、政治的影響力を行使することを狙う、重要な戦場的サブカルチャーとして見なされている。実際、アメリカ福音主義は芸術・文学・音楽における固有の表現様式を発展させた傍流文化であり、固有の傍流教育制度と科学観を有している。19世紀末期から20世紀初頭にかけて、事態はかなり異なっていた。この短い期間、福音派はアメリカ社会・政治・文化において、アウトサイダーではなく主流派として自己認識することができたのである。この失われた世界を垣間見るために最も適した窓口を提供してくれるのが、福音派の機関紙『キリストの使者と我らが時のしるし』である。本講演では、ヴィクトリア朝文学の連載作品を二点取り上げる。二作を通じて、福音派が文化のなかで確立した主流的な位置づけと、その変化とをみる。とりわけ、冒険的で男性的なロマン主義から、より狭く限定された家庭的感傷性へと移行していく運動を、『キリストの使者』紙が読者に差し出した捧げ物から読み取る。おそらく後世の視点から見るからこそ、この移行は、福音主義が主流から退き、反主流の重要なサブカルチャーとして位置づけなおされる兆しとして理解できるのだろう。



ロジャー・ロビンスは東京大学グローバルコミュニケーション研究センター・教養学部准教授。アメリカ合衆国テキサス州ダラスに生まれ、ハーヴァード大学で神学修士号取得ののち、デューク大学で博士号を取得。アメリカ福音主義の諸潮流について論文多数。著書に『A・J・トムリンソン：市井の近代主義者』（オクスフォード大学出版、2004年）、『アメリカのペンテコステ運動』（プレイガー、2010年）がある。

15 : 00～16 : 00

小説のイラストレーションと複製技術

寺田 寅彦（東京大学）

十九世紀はイラストレーションの時代といわれる。実際、この時代には本や雑誌に掲載される小説の多くにイラストレーションがつけられた。そもそもテキストに絵をそえるという意味での「イラストレーション (illustration)」という語の用いられ方自体が、十九世紀のものだった。このようなイラストレーションの発展は、複製技術の発展と深い関係にある。そこで、このレクチャーではイラストレーションの技術を概観し、十九世紀の後半にフランスをはじめとして広く用いられたジロタージュという複製技術を説明する。そして、この技術がどのようにイラストレーションと小説の受容を変えていったかを考える。新聞と同じく大量に生産されるイラストレーションが近代的なものであったことを、このレクチャーで考えたい。



寺田寅彦は東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻比較文学比較文化コース教授。2001年パリ第7大学にて文学博士号取得。主要論文：「小説の挿絵 ～変換と変異としてのイラストレーション～」(喜多崎親 [編]『西洋近代の都市と芸術・パリ I ～19世紀の首都～』所収、2014年)、「文学と絵画」(小倉孝誠 [編]『十九世紀フランス文学を学ぶ人のために』所収、2014年)など。現在、世界各国の英語の教科書を題材にテキストと挿絵の関係をテーマに研究を進めている。

6月24日

14:00～15:00

子供部屋の扉の影にボアコンストラクター
～1920年代の東アジア英語新聞における英語文芸文化～*

ピーター・オコナー (武蔵野大学)

1920年代初頭は、東アジアに近代化の最初の大波が押し寄せた時期である。しかし中国と日本に入植していた英語話者たちがこの大波を受け止めるまなざしは、冷ややかだった。マリネッティの「狂った物質主義」も、D・H・ロレンスの「新しいポルノグラフィ」も、彼らにはまだ早かったのである。当時の英字新聞、とりわけ『ノースチャイナ・デイリー・ニュース』や『ジャパン・クロニクル』の批評欄を一瞥すると、一見彼らの文芸嗜好は中流的で保守的なものを離れない印象を与える。しかし実際には、神戸・東京・上海の読者たちは1920年代の活気ある文芸文化の一翼を担っていた。日本と中国に住まう英語話者たちのコミュニティはきわめて自律的で、英語新聞だけでなく、アマチュア劇団や、劇団のツアー公演、オペラやサーカス劇団、名のあるジャズバンドやパントマイム・オーケストラ、音楽サークルや文芸サークルをも支えていたのである。本講演では、中国と日本に居を構えた英語話者たちの文芸文化の構造と緊張関係とを検討する。とくに注目するのは二つの小説、ジョン・パリズ『キモノ』(1921年)とギルバート・コリンズ『アジアの花:ニホンの物語』(1923年)である。二作の検討を通じて、外国人移住者と現地のアジア人との関係について考えたい。



ピーター・オコナーはロンドン大学東洋アフリカ研究学院で歴史学の博士号を取得し、現在武蔵野大学で教鞭をとっている。近年では東アジア、東南アジアを舞台にした国際的なメディア史について講演と執筆を行ってきた。著書に『東アジアにおける英語出版ネットワーク、1918-1945年』(2010年)がある。最近はオランダのライデンの出版社ブルルと共同して、英語新聞のデータベースを運営している。

15 : 00～16 : 00

新たなミドルブラウ読者の創成
～『デイリー・メール〈海外版〉』(1919-1939年)の連載小説を手掛かりに～

渡辺 愛子 (早稲田大学)

20世紀戦間期、イギリスでは下層中流階級および一部の労働者階級の読者を中心にタブロイド紙(大衆紙)が広く普及していた。そこに掲載された連載小説は、高尚な知識や教養を必要とする従来の正典的な小説や、当時のハイブラウ志向の者たちの間でもてはやされていた前衛的で難解なモダニズム文学を忌避する人たちが読みふけていたものだった。テーマはおもに、日々の生活のなかで突然起こるセンセーショナルな事件やロマンティックな情事といった内容であったことから、作者たちは新聞社から報酬を得て「売れる」作品の執筆に余念がなかったことが予想できる。したがって、このような小説を「ミドルブラウ」とみなすことに、大きな異論は出ないであろう。一方で、それを受容していた「ミドルブラウ読者」が誰であったかということについては、おおよそ上記の階級に属す人々であろうという想定はつくものの、いまだ不確定要素が残る。そこで本講演では、戦間期当時にもっとも読まれていたタブロイド紙『デイリー・メール』に注目し、とくにイギリス帝国の読者のために再編・発行されていた同紙の〈海外版〉の動向を分析することで、〈国内版〉とは異なる「ミドルブラウ読者」の広がりについて考えてみたい。



渡辺愛子は早稲田大学文学学術院教授。2002年東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。東京大学助手、早稲田大学専任講師・准教授を経て現職。専門は現代イギリス地域研究。とくに、20世紀イギリス文化史、文化外交史、文化理論。最近の論文に“‘Heirs to the World’s Culture’: English Literature in the *Moscow News*, 1939-41’(Peter Robinson と共著), *Japanese Journal of European Studies* (Waseda University, 2017), vol. 5; ‘Creative Custodians: English Heritage’s New Approach to Conserving English Heritage’, *Japanese Journal of European Studies* (Waseda University, 2015), vol. 3; ‘The Politics of Exhibiting Fine Art in the Soviet Union: the British Council’s Activities 1955-1960’, *The East Asian Journal of British History* (2014), vol. 4 など。なお、本報告の詳細は、2018年に中央大学出版部より刊行予定のミドルブラウ研究論文集に所収の予定。

*英語による講演